

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530651

研究課題名(和文)「ナラティブ・アプローチ」を用いた「あしなが育英会」の支援活動に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical minded research on the support service of "Ashinaga Scholarship Society" using "narrative approach"

研究代表者

水津 嘉克 (Suitsu, Yoshikatsu)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：40313283

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の最大の目的は、1990年代以降さまざまな形で理論的な蓄積が行われてきた物語論あるいはナラティブアプローチを用いてセルフヘルプ・グループやピア・サポートの現場でどのようなことが生じているのかを実証的に分析することにあつた。

データとしては「あしなが育英会」が出版している手記集をテキスト化したものを基盤に、当時の関係者や当事者に対するインタビュー調査を行い、それを上記の視点から分析することを試みた。分析の結果として、「共同体の物語」と「自己物語」の間にある緊張関係に着目して、これまでにはなかった研究成果をあげることができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：It is analyzing empirically what kind of thing having produced the most important purpose of this research at the spot of self help group or peer support using the narratology and narrative approach on which theoretical accumulation has been performed after the 1990s.

Based on the collection of the private papers which "Ashinaga Scholarship Society" has published, I conducted interviews investigation to the persons concerned and the party concerned with of those days, and used for it as a data. I think that I was able to get the result of research which was not in the former as a result of an Analyze paying attention to the tense relations between "community narrative", and a "personal story."

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：死別 ナラティブアプローチ 支援 セルフヘルプ・グループ ピア・サポート 自死

1. 研究開始当初の背景

現在の社会において、さまざまな困難性のなかで生きるにあたって、同じ悩みを持つ人同士による支援(セルフ・ヘルプグループ/ピア・サポート)の働きが、ますます注目されるようになってきている。

そのような中で、単に「同じ体験をしているんだから、慰めあいになるのだろう」といった安易で表面的な理解に留まるのではなく、セルフ・ヘルプグループやピア・サポートがどのような言語的営みとして展開し、そこにどのような意味があるのかということを理解することが、学問的にも実践面においてもますます重要な論点となりつつある。このような課題に、セルフヘルプ・グループ(以下 SHG とする)を中心的な場として展開するピア・サポートにおいて、物語形成に着眼して行うのが「ナラティブ・アプローチ」と呼ばれる研究群である。

1990年代の日本の社会学においては、家族療法の「ナラティブ・アプローチ」に触発されて、個人が自己物語を書き換える現象に着目する研究が現われた(野口裕二『物語としてのケア』(医学書院,2002)、浅野智彦『自己への物語論的接近』(勁草書房,2001))。これらの研究においては、自己物語書き換えの場の一つとして、SHG が挙げられている。しかし、日本においてこの分野における実証的な研究、あるいは現場でのさまざまな理論的・実践的バリエーションを考慮に入れたうえでの研究が社会学の分野で十分になされているとは言い難い。

個別のグループ、あるいは、いわゆる仲間(ピア)同士のコミュニケーションにおいて、どのように自己物語の書き換えがおこっているのかは、まだ十分に研究されたとはいえず、実際にそのような書き換えのプロセスがおこっているのか否か、あるいはそのプロセスとはどのようなものなのかは明らかにされていない。要するに理論的に理想的な状況を語っているにすぎず、現在の社会学が絶えず直面せざるを得ないその実践的な可能性に至っては、ほぼ何も示すことができていないのが現状である。

今回の調査・研究においては、上記のようなピアサポートの現場として、具体的に「あしなが育英会」を調査対象として設定し、「あしなが育英会」において過去において実践されてきた活動と、現在も続けられている活動を「ナラティブ・アプローチ」の側面から分析することを目的とする。

2. 研究の目的

本研究は社会学において主に理論的分野で蓄積されてきた「ナラティブ・アプローチ」の議論を、セルフ・ヘルプグループ/ピアサポートの現場での調査にもとづく検証を行うことを目的とする。具体的には「あしなが育英会」を調査対象として設定し、そこでの「回復の物語」への自己物語の書

き換えのプロセス、その物語の「持ちのいい物語」としての有効性、そしてこれまであまり注目されてこなかった「困難な物語」の内実に関して注目し、それらを相互に関連させつつ、現場に還元可能な調査研究を目指すものである。

上記のことを踏まえ、本研究期間の中で明らかにしようと考えている論点は以下の三つになる。

(1) 第一の研究目的は、A. Frank らによって論じられてきたいわゆる「回復の物語」のプロセスを明らかにするというものである。

社会的に様々なスティグマを背負ったなかで形成されてきたと考えられる遺児達の自己物語が「あしなが育英会」の活動のなかで、異なったかたちへの物語への書き換えが行われているとするならば、その具体的なメカニズムはどのようなものなのかということ

を明らかにしていく必要がある。

(2) 二つ目の研究目的は、いわゆる「持ちのいい物語」に関する検証である。

上記のように「あしなが育英会」において一定の自己物語の書き換えが実践され、その物語が仮に「あしなが育英会」という一定の「共同体」において維持されていたとしても、その後「あしなが育英会」を離れたあともその物語は維持されるのだろうか(「あしなが育英会」の奨学生達は、当然のことながら専門学校・大学などを離れば一般社会に出て行くことになる)。一度形成された「回復の物語」が、いわゆる「持ちのいい物語」としてその後の彼らの人生の困難性に対して、どの程度効力をもち得るのか。そして仮に維持されているとすればそれはどのような要因によってか、また維持されないとするならばそれは何故かを明らかにする必要がある。

(3) 最後の研究目的は、上記二つの目的とは一見相反する「困難な物語」に関連するものである。

一般的に「ナラティブ・アプローチ」と呼ばれるものは、いわゆる「回復の物語」をありきで展開されており、物語が成功裡に書き換えられない場合を問わない傾向がある。しかし、この前提は本当に確かなものだろうか。前述の自論文のなかでも触れているように、「自死遺児」などの場合、そもそも親が自死したことを他者に提示するだけでも困難な状況に長年直面してきている。自死に対する日本社会の強固なスティグマの元に形成されてきた自己物語をそもそもそんなに簡単に放棄することができるのだろうか? 外部からみると「困難な物語」としか見えないものなかで生きていくことを選択していくことも十分あり得るのではないかと、という問いも注意深くみていく必要があると考えられる。

「困難な物語」とは、一見その反対事例とも考えられる「回復の物語」「持ちのいい物語」とどのように異なり、どのような形で維持さ

れているのか。それが外部からの働きかけにもかかわらず維持されてしまう要因とはどのようなものなのかを明らかにしない限り、前述の「回復の物語」ありきの議論は、非当事者による単なる楽観主義的なものとしかみられかねない可能性を内包している。目的(1)(2)の二つの論点をより当事者目線で説得力のあるものにしていくためには、この「困難な物語」に関する議論はどうしても必要になってくるはずである。

3. 研究の方法

自死遺児の手記集『自殺って言えなかった。』をOCRで読み取りテキスト化したデータを分析の出発点とし、その上で実際に「あしなが育英会」の職員、奨学生、奨学生OBに継続的なインタビュー調査を行う。23・24年度は主に研究目的(1)(2)に焦点を当てて調査・分析を試み、24・25年度はそれに加えて、現在「あしなが育英会」の活動に関わっている「死別体験者」も調査対象として設定し、研究目的(3)にも焦点を当て調査を進めていく。分析手法としては、「ナラティブ・アプローチ」的な視点のみでなく、ライフヒストリー研究の手法も取り入れていく。

4. 研究成果

本研究課題の最大の目的は、1990年代以降さまざまな形で理論的な蓄積が行われてきた物語論あるいはナラティブアプローチを用いてセルフヘルプ・グループやピア・サポートの現場でどのようなことが生じているのかを実証的に分析することにあつた。

データとしては「あしなが育英会」が出版している手記集をテキスト化したものを基盤に、当時の関係者や当事者に対するインタビュー調査を行い、それを上記の視点から分析することを試みた。分析の結果として、「共同体の物語」と「自己物語」の間にある緊張関係に着目して、これまでにはなかった、研究成果をあげることができたと考えている。

それらは2011年/2012年/2013年の日本社会学会大会での学会発表や、2013年の分担執筆のかたちでまとめることができた。

本研究の最大の成果は、研究目的に述べたように、これまで理論的な蓄積は行われてきたが、それに関する実証的な調査と議論が欠けていた領域に、現場との架け橋となるような論考を世に出すことができた点である。研究目的としてあげていた(1)に関しては、ある程度の成果を出すことができたと自負している。

しかしその一方で、当初目的としてあげていた、セルフヘルプ・グループにおける「持ちのいい(自己)物語」に関して、あるいは「回復の物語」と対の概念になるのではと仮説を立てていた「困難な物語」に関しては、研究期間中に十分な論考を試みることができなかった。しかし、インタビュー調査を行う過程で、この様な問題関心を当事者の

方々と共有する機会は複数あり、それに関連する語りもデータとして得ることができた。このことは今後調査・研究を継続していくうえで大きな収穫であったと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

水津嘉克 2012 「逸脱(排除対象)分析枠組みとしての「レイベリング理論」の整理・再検討 -1-」 『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』(63): 185-192. 【査読無し】
<http://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/1123?cp=2>

水津嘉克 2013 「自死遺児による語りにおける物語り変容の可能性 その困難性に着目して」 『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』(64): 125-133. 【査読無し】
<http://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/1123?cp=2>

〔学会発表〕(計 3件)

水津嘉克 「自死遺児の手記における語りの変容可能性 『自殺って言えなかった。』を事例として」 2011年9月17日 関西大学 社会病理・逸脱(2)

水津嘉克 「自死遺児による語りの『変容』可能性と不可能性」 2012年11月3日 札幌学院大学 社会病理・逸脱(1)

水津嘉克 「『二人称の死』への物語論的アプローチ・その課題と可能性」 2013年10月13日 慶應義塾大学 福祉・保健・医療(4)

〔図書〕(計 1件)

水津嘉克 2013 「第4章 葛藤を承認すること、沈黙を共有すること あしなが育英会を「物語の共同体」として読む試み」 伊藤智樹(編著) 『ピア・サポートの社会学 ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く』, pp93-122, 晃洋書房.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水津 嘉克 (Suitsu Yoshikatsu)
東京学芸大学 教育学部 人文科学系
講師
研究者番号：40313283

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：